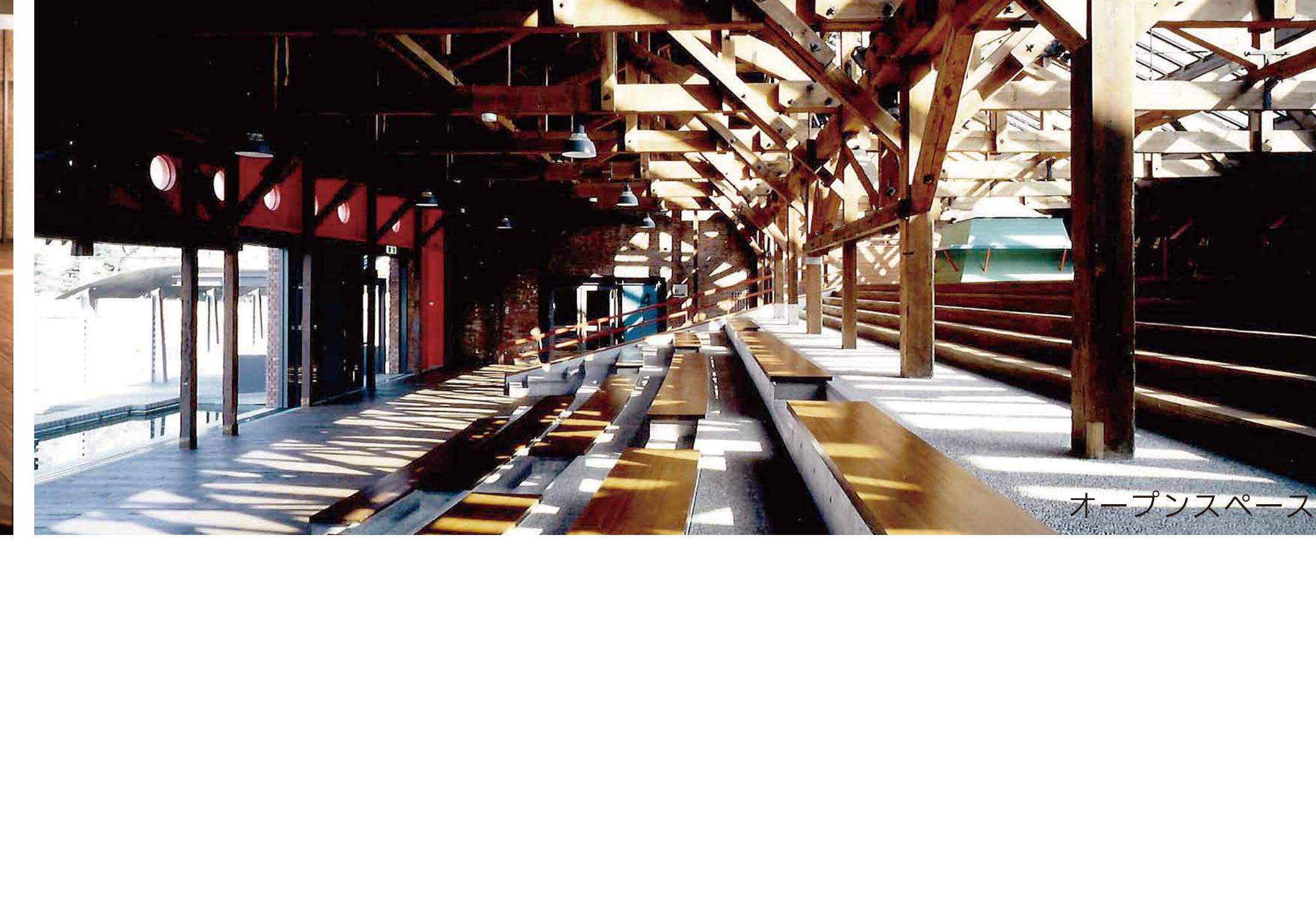




芝生広場からの外観



ミュージック工房



オープンスペース

金沢市民芸術村

水野 一郎

金沢工業大学／金沢計画研究所

主な用途：展示、音楽練習、オープンスペース、舞踊及びレストラン

構造・規模：W+RC 造、一部 S 造

延床面積：4,017m²

日本産業の一時代を担った紡績工場は使命を終えた後、跡地利用で各地の地域活性化に貢献している。金沢の場合は、大和紡績の広大な工場跡地を市が取得した際に、壊す予定で敷地の隅に残っていた倉庫群を市長が見て、何かに再利用できないかと提案したことから金沢市民芸術村の物語が始まった。さっそく利用検討委員会が設置され、アート系の利用を柱に、いくつかの選択肢の中からアマチュアや若者を対象とした創造活動に的を絞り込んでいった。

(ハードのデザイン)

倉庫は6棟、大きさも形も異なるものが一直線に並んでいた。大正末期から昭和初期にかけて別々に建設されたものである。

その倉庫群に多くの人々が惚れ込んでしまったことから物語がスタートしたので、新築の劇場ホールだったら到底、納得してもらえぬような動線計画、舞台機構、客席処理が許されたが、それを認めてくれたアーティスト達の空間への敏感さを改めて認識することとなった。それは他のミュージック工房やアート工房にも共通することだった。

(ソフトのデザイン)

利用検討委員会からの答申案は、収容するジャンルを演劇、音楽、美術とし、21世紀の生活文化のクリエイションとして重要なエコライフを加えることとした。美術館や文化ホールが完成した芸術の発表の場であるのに対し、ここは生まれ出んとする芸術胎動の場の提供であり、伝統的芸術の強い金沢にあって、現代的な芸術創造への支援の場である。

管理運営は極めて理想的なもので民間ディレクターを登用して運営を一任し、365日、24時間オープン、低料金、使用上の規則なしの利用者自主管理というプログラムであった。

